

論文審査の結果の要旨及び担当者

報告番号	博（医）甲第 1224 号	氏名	山吉 隆友
論文審査担当者		主査教授	松山 俊文
		副査教授	田口 尚
		副査教授	河野 茂
論文審査の結果の要旨			
<p>1. 研究目的の評価</p> <p>種々の増殖因子とその受容体、下流のシグナル伝達因子は癌治療の分子標的になると考えられ、すでに肺癌では EGF 受容体を分子標的とする治療薬の臨床応用が始められている。この研究では肺癌組織での keratinocyte growth factor (KGF) とその受容体の発現を免疫組織化学的に検討し、増殖活性、リンパ節転移、予後との関連から解析し、肺癌における関わりを明らかにしようとしたものであり、目的は十分に妥当である。</p>			
<p>2. 研究手法に関する評価</p> <p>用いられたのは原発性肺癌組織 61 例（腺癌 31 例、扁平上皮癌 30 例）であり、対照として切除標本 10 例の非腫瘍部分がとられた。肺癌組織での KGF, KGF 受容体の発現をウェスタンブロッティングにより確認するとともに、その抗体を用いて免疫組織化学的検討が行われ、連続切片を用いて Ki-67 の発現を見ることで KGF, KGF 受容体を発現している個々の細胞レベルでの増殖能が評価された。臨床的な指標としてリンパ節転移、5 年生存率を選び、KGF, KGF 受容体の発現との相関を見た。以上の手法は臨床検体を用いた解析を行う上で標準的なものである。</p>			
<p>3. 解析・考察の評価</p> <p>解析の結果、KGF, KGF 受容体の発現と腺癌のリンパ節転移や予後には相関があること、一方扁平上皮癌では予後に逆相関があることが明らかになった。これは KGF の持つ増殖促進能と分化促進能の二面性を反映しているとも考えられ、興味のある研究成果で今後の進展が大いに期待される。審査員は全員一致で博士(医学)の学位に値するものと判断した。</p>			